



教育研究
50年のあゆみ
前橋市教育研究所
2009

発刊のことば

前橋市教育研究所は、平成20年度に設立50年の節目を迎えました。さらに今年、平成21年度は、前橋市が中核市となり、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第59条に基づき、教育研究所が市独自の教職員研修を開始いたしました。まさに今年は、教育研究所にとって、半世紀の歴史を礎に新しい出発をする大きな節目の年であると思います。その節目の年に当たり「教育研究30年のあゆみ」に続いて「教育研究50年のあゆみ」を発刊することといたしました。

発刊に当たり改めて10年、20年、30年のあゆみを読み返してみますと研究テーマや業務内容が不易の部分でしっかり受け継がれ、しかも時代の要請に機敏に 대응しており、先輩諸氏の教育研究及び研修に対する真摯な思いに接することができました。そして、大勢の教育関係職員が学びの拠点として教育研究所に集い、前橋の教育の発展のために献身的な努力を積み重ねてきた歴史に、思わず襟を正さずにはいられません。また、群馬県、関東、全国の研究所連盟に加盟し、県内外に教育研究の成果を発信し他の研究所と交流してきたことも前橋市の教育研究所が今日の姿として大きく発展してきたことに繋がっていると思います。

近年、社会の急激な変化に伴い教育界も大きく変化し続けております。平成18年に教育基本法が60年ぶりに改正され、それを受けて教育三法が改正され、今年度は新しい学習指導要領の移行期にあります。社会の変化と教育改革のうねりの中で、教育研究所は半世紀の歴史に裏付けされた実績を礎に、中核市としての権限と責任のもと、新しい教職員研修を開始しました。人材育成の視点から教職員のライフステージに応じた研修計画を作成し、それに基づいた研修体系を築きました。これまで県の総合教育センターで行われていた特別研修を前橋特別研修として実施し、実践的な授業力と経営力をもつ前橋の教職員を、計画的に育てていく所存です。

教育研究所50年の歴史を振り返る時、それを引き継ぐ任務の大きさと重さを痛感しております。新たにスタートさせた市独自の教職員研修が、前橋の学校と教職員にとってさらに意味のある研修となるように改善を進めて参ります。そして、かつて前橋藩の学問の府であった「求知堂」を愛称とした教育研究所は、新しい時代における教育研究所の果たすべき役割をさらに追究し、地道な教育研究のよき伝統を創造的に継承発展させていかなければならないと考えております。

平成22年2月

前橋市教育研究所長 武居 朋子

愛称「求知堂」の由来



前橋藩主酒井忠挙（さかいただたか）は、1691年（元禄4年）春に藩校『好古堂』を設置し、ついで1700年（元禄十三年）には『求知堂』を開きました。『好古堂』や『求知堂』には「常に学問を心がけよ。」と7歳で入学、40歳以上まで在学させました。上は家老から下は兵士まで、二、三男や浪人でも心あるものは参席を許され、日に三百四、五十人から四百人が学んだといえます。忠挙は、百姓の子を『求知堂』の指南役に推挙したり、藩校を作る一方で領内の町人百姓を対象とした教育施設をつくろうとしたりして、格式にこだわらず広い心で学問の門戸を広げました。このように、前橋市の組織的な教育は藩校としてはじまったものの、その理念は、武士だけのための教育におかれていたわけではないことが分かります。

「名利のためにする学問は不学に劣る。不学では百年生きても何の益も無い。」と、学問の理想を追求し自ら範を示そうとした藩主忠挙の姿勢に、今日の前橋の教育の原点を見い出すことができます。

参考文献：前橋市教育史、前橋市史

目 次

発刊の言葉 前橋市教育研究所長 武居 朋子

I 刊 行 に 寄 せ て

| | | |
|----------------|-------|--------|
| 前橋市教育委員会教育長 | 佐藤 博之 |1 |
| 前橋市小中学校校長会会長 | 平澤 明 |3 |
| 前橋市教育研究所運営会議座長 | 河野 庸介 |4 |
| 前橋市教育委員会指導部長 | 清水 弘己 |5 |
| 前橋市教育委員会学校教育課長 | 青木 博 |6 |

II 50周年記念特別寄稿

前橋市教育情報ネットワークMEMENTの歩み

前橋市教育委員会 青木 美紀夫7

III 教育研究50年のあゆみ

| | |
|----------------|---------|
| 教育研究所の沿革 |14 |
| 教育研究の記録 |39 |
| 教育研究所の変遷 |76 |
| 教育研究所所在地の移り変わり |79 |
| 条 例 規 則 等 |80 |

IV 教育研究 新たな一歩

| | |
|-------------------|---------|
| 平成21年度教育研究所運営方針 |85 |
| 平成21年度教育研究所事業 |86 |
| 総合教育プラザ内教育研究所の配置図 |93 |

あとがき96

I 刊行に寄せて

受動から主体へ

前橋市教育長 佐藤 博之

前橋市教育研究所は昭和33年に当時の城南小学校に設立されて以来、様々な紆余曲折を経ながら半世紀にわたり県都前橋の教育研究と教職員研修の中核を担ってきました。平成9年、設置場所や従事する職員の確保など多くの課題に取り組みながらの運営に大きな転機が訪れました。前橋市総合教育プラザの誕生。施設内には教育研究所、教育資料館、幼児教育センター、教育相談所、フィルムライブラリなど、教育関係の多くの施設が統合的に配置され、さらに3万冊の蔵書を擁する一般市民のための図書室も併設され、前橋の教育の殿堂としての活動がスタートしたのです。

そして今年度、平成21年4月、教育研究所は2度目の大きな転機を迎えました。前橋市の群馬県初の中核市への移行に伴う県費負担教職員の法定研修の実施。そして研修実施のための大幅な組織拡大。これまで群馬県の教育センターが中核となって実施していた初任者研修や10年経験者研修、特別研修等が前橋市の研究所で実施される。それは前橋市が目指す教育のあり方に沿った研修の実施が可能となるという大きな意味を持っています。

前橋市の教育の実態に応じた研修が可能になる。実態とは子どもたちと学校と地域と教育行政すべての前橋らしさについての実態です。そして、また、前橋市の教育が目指すものを実現する方途としての研修でもあります。前橋市の教育が目指してきた県都前橋の王道としての教育の考え方、そして現場で鍛え上げられてきた教育の伝統、それらはあるものは明文化されそしてあるものは未文化のまま、それでも前橋の教師の血の中に生きている伝統であり、自負であります。

昨年の4月に始まった研修に関する語録の白眉は初任者研修で語られまし

た。「私たちは今年の初任者40人の学級担任だと思っています。」これはもしかすると「私たち」ではなく、「私」という一人称で言われたのかも知れません。いずれにしろ、この言葉は前橋市が中核市に移行したことの意味を雄弁に語っています。ひとつはスケールメリットを中心とした能率主義からの脱却。研修集団は一人一人の姿が見えるべきであるということです。そしてもう一つは研修の主体は誰なのかという問いかけ。「覚えてもらう、学ばせる、教え込む」という教育行政が主体の研修は、多くの成果を上げながらも研修者は客体とならざるを得ない。そして研修はノルマとなってきました。

授業の理想は学びの主体が子どもたちにあることです。（この単純な命題に何十年教育界は困惑していればいいのでしょうか！）「学級担任」とは学習に関する首謀者の謂（いい）です。研修者自身が「主体」なるための周到な研修計画と支援過程が用意されることを示唆しています。

前橋市の教育研究所「求知堂」は設立後半世紀を経て、真の意味ですべての教職員のための主体的な研修と研究の場として再スタートをきろうとしています。折りしも、新しい学習指導要領の本格実施の時期を迎え、教育改革の大きな流れは今まさに奔流となって教育の現場に押し寄せようとしています。「受動から主体へ」。前橋の教育の正念場に対峙する鍵は「教育の主体としての学校と教職員」を支える教育研究所が握っています。

最後に、これまで前橋の教育研究と研修の場としての研究所を支えてくださった多くの関係の皆様へ感謝申し上げますとともに、今、新たな研究所の確立に向けて困難に立ち向かっているすべての関係者のみなさんに敬意とエールを捧げ、あいさついたします。

前橋市教育研究所の設立50周年にあたって

前橋市小中学校校長会会長 平澤 明

前橋市教育研究所設立50周年にあたり、本教育研究所が、これまで前橋市の教育の充実・発展に大きく寄与してきたこと、また、教職員の研修・資質向上に大きな成果をあげてきたことに心より感謝申し上げますとともに関係者の方々のご尽力に敬意を表します。

折しも今年から、前橋市は中核市となり富士見村との合併も含めて新しい前橋市としてスタートし、今まで県総合教育センターで実施していた教職員の研修の一部を本教育研究所で実施することになり、前橋市総合教育プラザを拠点に、内容的にも物的・人的にも充実し、今後、より実りある教育研究ができるのではないかと期待しております。

思えば、前橋市教育研究所は、昭和33年に城南小学校内に設立されて以来、市内の小学校内を転々とし施設や指導員等の確保に苦労しながら、時代の流れに即応した教育相談事業（不登校・適応指導教室も含めて）や教育機器等（パソコン、ネットワークも含む）の研究・研修事業を柱に前橋市のときどきの教育課題解決に努めてきました。また、設立当時からの事業としての教職員自作教材・教具展も担当者の並々ならぬ努力で、年々参加者も増え定着してきました。そして、平成9年には、現在の前橋市総合教育プラザに移転し、全国的にも先進的なモデルとしての前橋市教育情報ネットワークも整備され名実ともに前橋市の教育研究の殿堂となったと思います。

今後、前橋市教育研究所は、愛称を「求知堂」として、「学校の力になれる研究所」を目指して、教育に関する調査研究及び教育関係職員の研修、前橋市教育情報ネットワーク（M E N E T）により情報教育とIT活用推進のための中核的役割を果たしていただくとともに、不易流行を踏まえた学校現場で喫緊の課題となっていることや教育理論の先導的・実証的な研究の推進など多くの現場教職員の要望・期待に伝えていってほしいと思います。

最後になりましたが、半世紀にわたり本教育研究所を支えてきた前橋市教育委員会の関係者の方々をはじめ、本教育研究所で研修・研究を積まれた多くの教職員の熱意と努力に感謝を申し上げ、お祝いの言葉といたします。

「求知堂」に期待する

教育研究所運営会議座長 河野 庸介
(群馬大学教育学部教授)

前橋市教育研究所が設立50周年を迎えられたことをうれしく思います。半世紀に及ぶその歴史の中で、本研究所が群馬県や前橋市における新しい教育の在り方を提示し続けてきたことは、何にも増して本研究所の存在意義を明らかにしていると考えます。21世紀に入り、激動する社会の中で、我が国の教育の在り方が大きく問われている今日、本研究所が、その半世紀にわたる成果を踏まえつつこれからの教育のあるべき姿について研究し、広く発信していくことを強く期待しております。

前橋教育研究所は、設立50周年を期して、「求知堂」という名称を得ました。私はこの「求知堂」としての前橋教育研究所に大いに期待している者の一人です。なぜならば、「知は力なり」と思うからです。私たちの先人は、弛まぬ努力によって獲得した様々な「知」によって思考を深め未知の世界を切り拓き、教育界に数多くの素晴らしい成果を残してくれました。今、前橋教育研究所が「知」を求める学舎としての性格を明らかにすることにより、この前橋の地に「知」を尊重し思考を深める雰囲気醸成されるに違いありません。新しい思考を生み出す「力」としての「知」を身に付け、その十分な活用を図ることにより新たな考え方を創造していく学舎は、必ずや多くの教職員が信頼を寄せる場となるであります。そして、授業改善の「力」としての「知」を求めるとともに、それを活用した実践的な授業の創造を目指すこの「求知堂」に、前橋のそして群馬の教職員が、一人また一人と参集することを強く願っております。

今日、各都道府県の教育研究所は、その機能を研究から研修へと移行させ、その役割を教員の研修に特化し、名称も教育研究センターへと変更しているところが多いようです。私は、前橋市教育研究所が、50周年を期に研究と研修を両輪とし、理論と実践を融合することによって新しい教育の在り方を提言してくださることを強く願っております。それが、「求知堂」という呼び名に込められた願いを実現する道であると思うからです。

前橋市教育研究所設立50周年を心よりお祝い申し上げます。

現場主義とネットワーク

前橋市教育委員会指導部長 清水 弘己

教育研究所は計画的に教職員の資質向上を図っていく教育機関であるとともに、日々子どもへの指導や問題行動に直接向き合っている教職員のニーズや声を大切にし教育現場の課題解決に向けて適時に対応する機関でもあります。特に、学校・園と密接に関わる市教育研究所の重要な役割は教育理念の徹底と併せて、充実した授業支援を行うことにあると思います。授業や指導の具体的なイメージを伝え、実践に導いていくなかで教職員の指導力や資質の向上が一層図れるものと考えます。

教育研究所は50周年を迎えました。折しも前橋市は4月1日中核市となりこれまで県が行っていた事業の一部が市へ移譲されました。その一つに教職員の研修事業も含まれており、質実ともに充実した教育研究所が誕生しました。指導主事並びに経験豊かな講師等によるライフステージに応じた研修や移譲された初任研、10年目研修の法定研修等、理論的・実証的な研修講座が開講されました。特に、新学習指導要領と学校経営構想に基づいた特色ある学校づくりとの融合による「前橋らしさ」が表れた小回りのきく現場重視の研修体系が確立され、新生前橋にふさわしい教育を生み出していくものと思います。

教育研究所では新たな教育課題や教育改革の波の中で何が大切かしっかりと見極めながら、育てたい子ども像の共有化や教育現場への支援体制、保護者や市民へのアプローチ等のしかけを構造化していくことが重要であると考えます。今後、課題解決に取り組んでいる教職員を支援する場、課題解決に向けて議論できる場として、放課後、休日等、教職員のための「学習コミュニティの場」としても広く利活用されていくことが求められます。特に、教育研究所が中核となって実践的指導力の向上を図り教師力を高め、その教師力のネットワークをつなげ、前橋の教育力向上の組織づくりを目指していくことを期待いたします。

教育研究所への期待

前橋市教育委員会学校教育課長 青木 博

前橋市教育研究所が開設されて 50 周年を迎えました。この半世紀にわたり研究所が本市学校教育の発展に果たしてきた役割を考えると、これまで研究所を支え有為な人材の輩出に尽力されてきた各位に心から感謝と敬意を表す次第です。

さて、この記念すべき年に前橋市は中核市としてのスタートを切り、県からの権限と責任の移譲の下に新たな教職員研修を始めました。これまで県の総合教育センターで実施されてきた法定研修である初任者研修や 10 年経験者研修を実施する他、本市の諸課題を踏まえた「小回りの利く」研修を行える点に中核市研究所の大きなメリットがあると考えます。

折しも、今年度より新学習指導要領の移行期に入り、各学校ではその趣旨を踏まえた取り組みが始まりました。「生きる力」の育成に引き続き取り組む中で、知識・技能の習得と活用や言語の能力の育成、キャリア教育などを通じた学習意欲の向上、学習習慣の確立など様々な課題に取り組んでいただいています。

これらの状況の中、教育研究所では上記の諸課題を踏まえつつ、先生方のライフステージに応じた研修計画を作成し、教師としてのそれぞれの段階で求められる資質・能力の向上を目指しています。経験年数に応じた節目研修、前橋授業研修、前橋特別研修、希望研修、出前研修など数多くの研修グループを用意し、本市の課題解決や先生方の要望にできる限り応えられるように努めております。

過日、研究所の指導主事が「研修会で知り合った先生から授業づくりについて相談を受けた。その後何度か授業づくりについて一緒に話し合ったところ、その先生が授業に見通しをもてるようになったと喜んでいた。」と話していました。互いに顔を合わせて話し合える距離にある中核市の研究機関ならではのことと思います。

今後、このように学校現場の先生方の具体的な課題に親身に対応したり、その時々の教育課題を踏まえた研修を提供したりして、できる限り学校に近い教育研究所で在り続けることを期待いたします。